

令和7年度高岡市美術館企画展

伏木と能登ゆかりの名品を訪ねて

一重要文化財特別公開 等伯仏画と洛中洛外図屏風

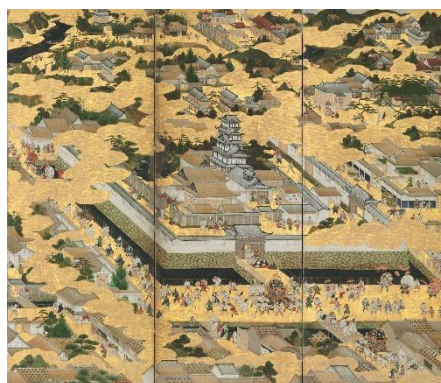
同時開催 祝100年！コレクションで振りかえる昭和

構成と展示作品

高岡市美術館に寄託されている2件の国指定重要文化財を、10年ぶりに並べて展示します。大法寺所蔵の長谷川信春（等伯）作品と勝興寺所蔵の勝興寺本《洛中洛外図屏風》は、室町時代、江戸時代を経て、現代へと受け継がれてきた、当市が誇る名宝です。第1部では令和6年能登半島地震で被害を受けた伏木地域のシンボル・勝興寺に伝わる文化財、また能登ゆかりの等伯作品をとおして、あらためて地域文化の豊かさを認識する機会とともに、市内にある美術館へ足を運び、美術に親しむきっかけを提供します。

また、2025年は「昭和100年」。1926年に始まる昭和が続いているとするならばちょうど100年にあたり、同時開催となる展覧会第2部では、美術作品によりこの時代を振り返ります。西洋美術受容の葛藤が一段落し、新たな潮流が生まれようとした昭和初期の美術は「ルネサンス」に例えられる一方、軍国主義の足音が日常にも忍び寄り、作家たちの創作にさまざまな影を落としました。昭和20年に終わる戦争は、多くの人びとの心に深い傷を負わせながらも、地方では疎開による文化の交流を生み、平和への希求や復興への意気込みを反映する作品の動機にもなっています。日常が平穏であることの喜び、どこか懐かしい面影を残すこれらの作品が、その後平成・令和を生きるわれわれに伝えてくれるものは何でしょうか。本展では、昭和初期から1950年代に制作された絵画、彫刻、工芸作品のコレクションを中心に展示、皆様をこの時代のタイム・トリップへと誘います。

①勝興寺本《洛中洛外図屏風》左隻（部分）
勝興寺蔵



第1部：

1. 伏木・能登ゆかりの近現代作家

小矢部川の河口、日本海沿岸部にある伏木は、律令時代に国府が設置されるなど富山県内でいち早く開けた地域であり、江戸時代から明治にかけては伏木港周辺の交易により大いに繁栄したまちです。モノが行きかう場に人の往来はあり、文人墨客に愛される名勝はあらたな美術が生まれる契機にもなりました。



日本画

②横山 大観《雨晴義経岩》高岡市美術館蔵
高岡市指定重要文化財

2. 重要文化財特別公開

現在は高岡・利屋町にある大法寺は、室町時代の放生津（現・射水市）に創建された日蓮宗寺院です。当時の放生津は海運の要衝として知られ、長谷川等伯の生地・七尾とは海路で結ばれており、越中国に能登との関係が深い仏画が伝わったのは、このような往来によるものでした。

伏木にある勝興寺に伝わる勝興寺本《洛中洛外図屏風》は、二条城が慶長8年（1603）に築城されたのを機に左隻の中心に描かれるようになる新たな形式の同図が誕生したことを示す、一対が揃った屏風の最も古い例になります。かつて国府があった現在地へ天正年間に環住を許された同寺は、近世をとおして北陸における浄土真宗の要として高い格式を誇り、公家や大名家との深いつながりの中で《洛中洛外図屏風》をはじめとする文化財が数多く伝来しました。



左：③長谷川 信春（等伯）《日蓮聖人像》高岡大法寺蔵
前期展示 国指定重要文化財

右：④長谷川 信春（等伯）《三十番神像》高岡大法寺蔵
後期展示 国指定重要文化財

3. 明治の名工一市指定文化財を中心に

明治時代、新政府は工芸品の輸出を奨励し、またその技術とデザインの向上を図るため、万国博覧会への参加や国内での博覧会開催に積極的な姿勢を示しました。福光（南砺市）出身の輸出商・圓中（まるなか）孫平や高岡出身の銅器商・角羽勘左衛門、金森宗七ら商人たちが販路を開拓、金沢からの職人の移住などにより技術の向上をみた高岡銅器は、時代の波に乗って隆盛期を迎えました。



金工
⑤二代 横山 彌左衛門《武人文大香炉》
高岡市美術館蔵
高岡市指定重要文化財

4. 工芸のまち・高岡一富山県指定無形文化財保持者を中心に

音楽や舞踊、演劇などの「芸能」や「工芸技術」など、かたちとしてあらわすことができない優れた人間の技を「無形文化財」といい、このうち価値の高いもの、工芸史上重要な地位を占めるもの、地方的特色が顕著なものが富山県指定無形文化財に認定されています。高岡市出身者では昭和39年に「勇助塗技術」で彼谷芳水、「蠟型鑄造技術」で2代須賀松園、「鍔絵技術」で高瀬想風が、平成2年には「蒔絵技術」で大井見太郎が指定されています。さらには、平成元年には彫金家の金森映井智が県内在住者として初めて国指定重要無形文化財保持者（いわゆる人間国宝）に認定され、これに続き、その器体を手がけていた鑄金家の大澤光民が平成17年に認定を受けました。認定された技術保持者の数は県内随一であり、彼らの技の研鑽と芸術性の高さが、現代に続く「工芸のまち・高岡」を支えてきました。



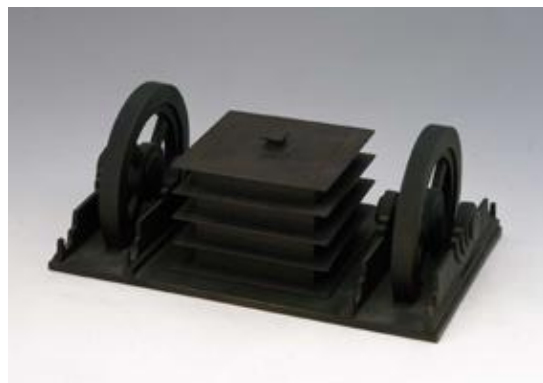
漆芸
⑥彼谷 芳水《浄炎》個人蔵（高岡市美術館寄託）

第2部：

1. 昭和戦前期—日本画・工芸にみる伝統とモダニズム

明治期以来の西洋美術受容の葛藤が一段落し、伝統を新しい思潮のもとに昇華させることで「近代」を目指した昭和初期の傾向は、「ルネサンス」に例えることができるでしょう。ここでは富山出身の作家たちの作品により、その潮流をみていきます。

また、産業の近代化に伴って効率化が進む一方、作家の個性を尊重しつつ工芸の現代性を主張するグループが数多く誕生したのもこの時代の特徴です。前衛的な形態の工芸作品など、新たな傾向を示すものが増え、ダイナミズムの肯定やモダンな生活様式への共感がうかがわれます。



左：日本画

⑦郷倉 千鞠《母子鳥韻図》

右：金工

⑧野崎 登作《双車輪 インクスタンド》

ともに高岡市美術館蔵

2. 戦争と作家

いわゆる十五年戦争期より戦時体制が強化され、長引く物資不足は美術家たちに時局を意識するよう迫り、彼らは表現者としてさまざまな岐路に立たされることとなりました。ここでは、戦争期の作家たちの心境を示す作品、都市部からの疎開をきっかけに県内美術に大きな足跡を残した作家の作品をご紹介します。

また当時、朝鮮半島は日本の支配下にあり、仕事のために現地へ赴いた日本人の数は少なくありませんでした。戦後80年を経て存在が忘れられつつある彼らの活動を、遺された作品により振り返ります。



日本画

⑨横山 大観《海暁》高岡市美術館蔵

3. 1950年代―「リアル」のはざま

戦後は民主化政策が推進され、美術においても、資材不足の解消と同時進行のスピードで積極的な復興と回復が図られました。抑圧された戦時を脱し、新たな「自由」を獲得した作家たちにとって、自己の内部にリアリティーをもって受け止められたものを表出させること、人間という存在や社会に対する現実感を視覚化させることは、新たな時代にむかう出発点となりました。作家たちが希求したそれぞれの「リアル」が感じられる表現を、1950年代の作品を中心にをご紹介します。



水彩画

⑨中村 忠二《初夏の窓》高岡市美術館蔵

エピローグ：マイタウン

最後に、高岡市出身の画家・堀浩哉による映像インスタレーション《マイタウン》を紹介し、昭和を振りかえる展覧会をクローズします。幼少期を過ごした町をたどる映像とナレーションは、昭和の面影を色濃く感じさせますが、表現されているのは懐古の感情ではなく、さまざまな記憶が重層的になった空間の只中にいる現在の「われわれ」の主体性を問うているようです。